

金銅製馬具 —原分古墳出土—

黄金色に光輝く馬具、しかしこれは金メッキの技術によって少量の金から多くの金銅板を作り出す生産技術によって可能となったのです。

イミテーション・ゴールド

金は私達が暮らす環境の中では腐食しない金属です。したがってその黄金色の輝きが変わることはありません。不変の輝きは人を魅了します。古代以来、金は人を引きつけ、そして人は金を求めました。

しかし金はとても希少な金属です。そこで考え出されたのが”イミテーション・ゴールド”すなわち金メッキの技術です。

金アマルガム法

古代の金メッキは、金アマルガム法という技術によって行われました。これは金と水銀を混ぜ合わせたペーストを銅板に塗り、加熱して水銀を蒸発させることで銅板に金をメッキするという技法です。こうして作られた金メッキ銅板を、特に金銅板と呼んでいます。

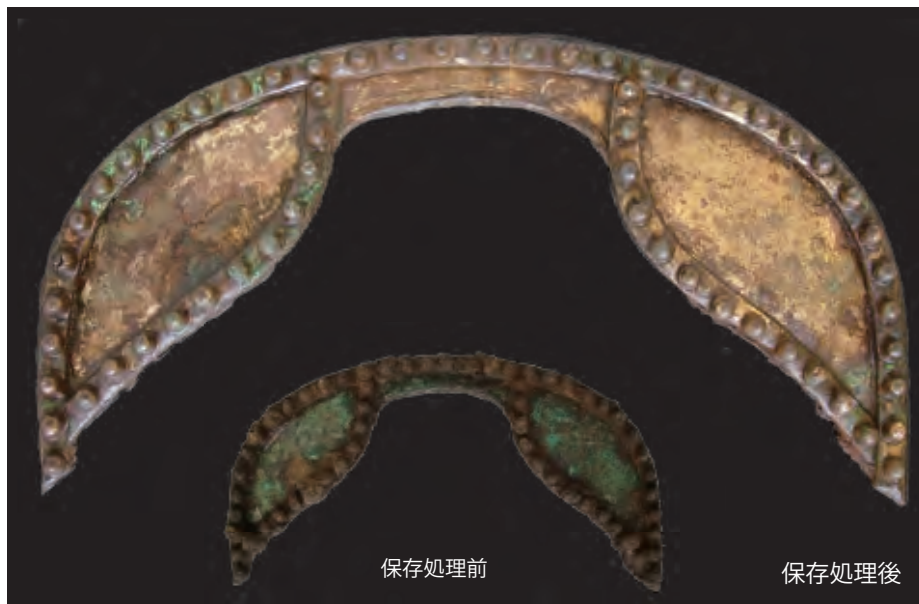
日本では5世紀代の古墳時代中期頃から始まり、6世紀代の古墳時代後期になって活発に生産されるようになりました。水銀の蒸気が発生しますから人体には有害な技法ですが、少量の金を元にして多くの金銅板を得ることができるようになりました。

金銅装の馬具

原分古墳は長泉町下土狩に所在する6世紀末から7世紀初頭頃の古墳です。原分古墳の横穴式石室からは多くの金銅装馬具が出土しました。

ただしこれらの金銅製品が、出土時点から黄金色に輝いていたわけではありません。長い年月土に埋まっていたので下地の銅板が腐食して表面に溶出し、全体が緑の銅サビで覆われた状態になっていました。

しかし、上の断面写真から分かるよう

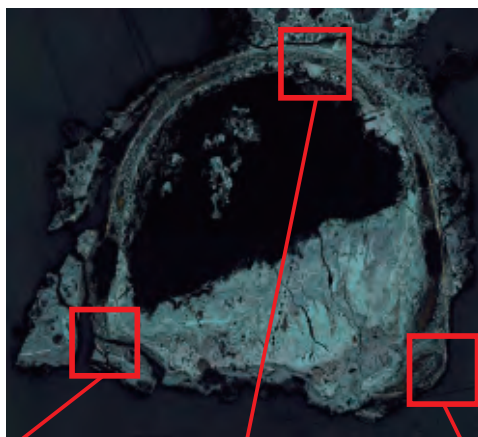


保存処理前

保存処理後



金銅装鞍金具鈔 (外觀)

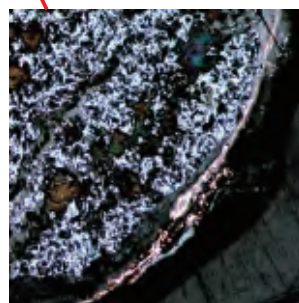
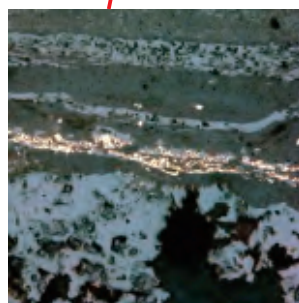
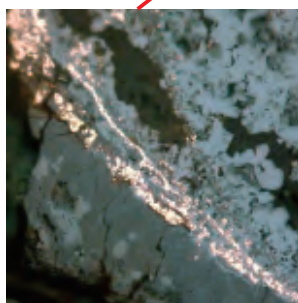


金銅装鞍金具鈔 (断面顕微鏡写真)

【金銅装鞍金具】

木製鞍の前後に取付けた飾金具です。鉄板の上に金銅版を張って装飾しています。保存処理によって黄金の輝きが蘇りました。

左は鞍金具の鈔の断面写真で、下は各囲み部分を拡大したものです。それぞれサビで覆われた中に、金の層が残存している様子が観察されます。



に、銅サビの中に金メッキの層が残存しています。表面の銅サビを化学薬品で溶解し、顕微鏡で覗きながら丁寧に除去することで元の黄金の輝きをよみがえ

らせることができます。

よみがえった黄金色の輝きは、時代を超えて私達を魅了してくれます。